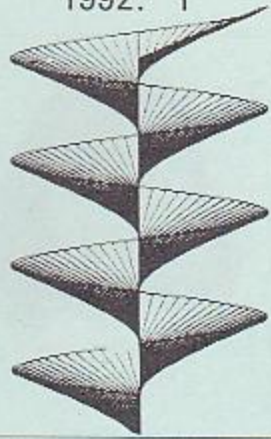


1992. 1



はるかにくす

No. 27

大阪工業大学図書館報

知能科学ブームと 図書

経営工学科 教授
工学博士

浅居 喜代治



新しい科学・技術が世に現われてくると、その内容を知ろうと、その方面の図書の需要が増えて多くの本が出版される。図書館でもその分野の本が引っ張りだこになるだろう。

これは、新しさや、かっこよさの魅力、未知への興味もあるが、もっと具体的には、この科学・技術を用いて懸案の問題を解くとか、未知の現象を解明したいとか、さらには新製品を開発したいという応用面が大きいだろう。

このように、ある分野の図書への購買意欲が高まってくると、書店にその種の本のコーナーができるようになる。例えば、マイコンやコンピュータ、ロボット、人工知能、ファジィ、ニューロなどのコーナーである。マイコンは、ここ10年来、図書コーナーのトップを占め、若者の人気を集めている。次いで、最近は、人工知能(AI)、ファジィ、ニューロなどであろう。人間に似せた知能の機能をコンピュータ上でソフトウェアを用いて実現しようとする科学であるから、マイコンとのつながりもあり、また身近かであり、脳の解明とその模擬とは、多くの人の夢でもあるから関心が高まるものと思われる。

特に、ファジィは、人間の大局的・概括的な知的情報処理の模擬を行い、一つのモデルを作ることを目的としているが、今から26年前にアメリカのカリフォルニア大学のザデー教授が提案して以来、内外で数千の論文、数百の書籍が出され、200もの実用化例があるから、これらの内容をくわしく知ることは容易ではない。

ところが、本学の図書館には、この方面の文献や図書がかなりあり、また無いときは文献検索の情報システムや、他の多くの図書館との相互利用のシステムを通じてコピーを入手するとか、現物を借用することができる。これは、急激に発展しつつある学問分野ではたいへん有難いことで、私や、研究室の卒研究生・大学院学生などは、たいへんその恩恵を受け、教育や研究上の効率を上げている。

ファジィは、昨年、日本で一つのブームとなり、まだ続いているが、これに次いで、人間の脳の神経モデルを近似的に表すニューラルネットワーク(ニューロと略称)が本年ブームになりつつある。これは、その学習能力がファジィの大局性と組み合わせられて、家電製品に用いられるようになってから、いわゆるニューロ・ファジィとして、世間によく知られるようになり、その文献や図書も多くなりつつある。

次に、ファジィの兄貴分ともいべきAIは、第5世代コンピュータなど、以前からブームを続け、最近落ち着いたが、エキスパートシステムとしての応用例も多く、既に多くの文献、図書があり、図書館の利用をおすすめしたい。

以上三つの科学をまとめて知能科学と呼んでいるが、これらは、いずれ融合・統合されて大きな科学として、次々と発展を続けていくものと思われる。

エッセイのススメ

私は、一時エッセイに凝ってよく愛読していたのですが、読むにしたがって著者が何を考えているかを知ることができ、とてもおもしろいです。

人間は、それぞれの日常生活を営んでいく上で、本音と建前の部分があります。その本音の部門が書かれているものがエッセイで、共鳴できるところがあると、思わずに顔がゆるみ、どんだんとのめりこんでいきます。読書をしている中で、私とは異なった考え方に会おうと、なるほどこのような見方もあるのかと、新鮮で視野が広がったような気がします。

また、まったく未知なものが書かれているときは、夢中になってその部分を読み、そのことが頭の片隅に残っていて、日常生活で役立つことも多くあります。



『ドクター・ジュノーの戦い』

マルセル・ジュノー著
(勁草書房)

大きな歴史の転換の蔭には、報われることのない小さな犠牲がいかに多くあったかを、過去の歴史から思い知らされる。正義感の強い者は、自らの意志で、またある者は、時代を嘆きながら、戦場に散って行った。

『戦いには常に双方の敵対者がいるだけである。しかし、彼らの近くに、そして時には彼らの内に突如として第三の兵士が現れる』

戦いの絵は、一方が勝利し他方が敗北したということだけを表すものではない。負傷した敵

応用化学科 4年次

北崎 まみ



エッセイ集の中で、最も好きなものは旅のエッセイ集で、旅行の前に読んで行くと、旅のおもしろさが倍増します。旅行する地域の歴史や名所を調べるのもいいですが、旅のものは、著者が実際に見て体験し、感じたことが書かれているので、ガイドブックなどでは得られない情報や楽しみ方ができ、ちょっと視点を変えて旅行ができるのではないかと思います。

二番目に好きなものは、料理に関するものです。料理をすることや、食べるのが好きな人には特にお奨めしたいですね。料理や食事がより楽しくなりますよ。

料理でも、日本各地、あるいは世界各国さまざままで、家庭環境でも大きく異なりますが、食文化や食生活の違いは身近なことだけに、あまり料理に興味がない人でも、読んでみるとおもしろいのではないかと思います。

エッセイと言ってもいろいろな種類があり選択に困りますが、まず最初は、興味のある分野のものを読みはじめることです。読んでみるとまた違ったおもしろみがでてきて、世界が広がると思います。

を攻撃したり、無抵抗な敵に対して残虐行為を働かないよう自制しなければならない。

防衛手段を剥奪されたすべての人々、負傷者であれ政治犯であれ、人間の尊厳が守られなければ、この勝利は完全なものとは言えない。全世界が戦争に巻き込まれ、中立性を保証できる国が一つもなくなる日が来るかもしれないことを、巨大な力とのはざままで、どうすれば悲劇的な断絶を感じないですむのか。

すべての国、すべての社会で、自分の戦いより自らの名誉を重んじる人々が続出することを期待したい。

戦争の極限状況にあってなお、敢然と自らの理想と信念に立ち向かったジュノー博士は、そう訴えています。



シリーズ 淀川ぶらり散策

第18話

「大阪弁 その2 ほな、いきまひよか」

浅井 三千治

淀の川面に映る街のネオンの瞬きが、静かにゆれているさまに、知らずしらずのうちに見入っている。少し酔ってしまったかな。

凍てつく夜、一人屋台で飲む酒には、熱燗が合う。ホロ酔いかげんには、やはり演歌のメロディがなじむ。それも、情のこもった文句の一語一語が、ゆったりとそして、しみじみと丁寧に歌われる大阪弁の演歌がお似合いだ。

日本を代表する古典芸能である文楽は、江戸時代に大阪で生まれ、大阪で完成された。文楽は、太夫の語る音楽「義太夫節」に合わせて人形が演技する演劇であるが、語られる義太夫節は、人物の会話をリアルに表現し、場の緊張感と高まりを、私達の感情に直接訴えかけてくる。情感を込めて語られる義太夫節の最も得意とするのが、悲劇をテーマにしたものである。主人公の「ころ」の葛藤のさまと緊張が、切々と我々に伝わってくる。大阪で生まれ、大阪で育った義太夫節のアクセントは、当然と言えば当然の話であるが、大阪言葉のアクセントである。

大阪弁は、アイウエオの母音が、ていねいに、端正に発音されることに大きな特徴がある。大阪弁はまた、テニヲハの省略に見られるように、会話の中味を文字で表すと曖昧さを残す言葉であるが、それ故やさしく、やわらかな響きで、温たかみがある言葉として機能し、そこに、味のある大阪弁の特徴が現われる。

言葉は、アクセントとテンポによって、随分受け手の印象が異なる。それはまた、生活のリズムとテンポの違いの反映でもある。

「もうかりまっか」「ぼちぼちでんな」で代表されるように、浪速の商人の世界は、中小企業のイメージである。そこでは、相手を前にして、したたかな金銭感覚と計算力に裏打ちされた、機知とシャレどころに富んだ会話の中で、商談が進められる。しかし、企業規模が拡大し、



近松「女殺油地獄」の一場面

(学研「現代語訳 日本の古典17」より)

商活動の範囲の拡大とテンポの速さが求められる現代ビジネスの社会には、大阪弁では、もはや対応仕切れない。

船場の上品で、やさしく、やわらかな口調の大阪弁は、そこに大店の旦那さん、ご寮さん、いとさん、こいさんが今も昔のような生活をしていて、初めて成り立つのである。「細雪」の世界が、既に大阪には見られなくなって久しい。

大阪市の人口は、昭和15年の325万人を最高に、今では262万人に減少している。わずかに昔の面影を残していた、船場のいとさん、こいさん達も昭和30年代後半に入ると、急に消えてしまった。ときあたかも、所得倍増政策以降の日本経済の発展期と時を同じくする。

今、大阪弁は「死語」になりつつあると言われる。この大阪弁が苦手とするのが、放送語である。ニュースを大阪弁でやったら、どうであろう。「只今から、本日のニュースをお伝えします。本日のおもな出来事は……」を「おまっとうさん、ニュースの時間でおま。きょうあったこと聞いとくなはれ、よろしおまっか、ほな、ボチボチいきまひよか……」。

やさしさと温たか味のある大阪弁が消え、後には、公害と「たん壺の町」と酷評されるほど下品で猥雑なイメージの大阪が残った。この大阪のイメージを変えようと、「好きやねん大阪」「大阪咲かそ」と色々取り組みがなされているが、ことばは文化であり、文化は日々の生活の反映であるとしたら、大阪人にやさしさと、温たか味のところが戻るまで、大阪の復権と文化の向上は期待薄い。

第18話「大阪弁 その2 ほな、いきまひよか」完

